

# 小さな交流のため



長崎県平戸市役所企画課国際交流員

Remco Evert-jan Vrolijk

レムコー・エバートヤン・フロライク

私がオランダ人の国際交流員として成田空港に到着した時、仕事について前任者に一八ページもの詳しいレポートをもらっていましたが、大体の仕事の内容を把握したつもりでした。しかし、それは大きな間違いでした。どれだけ詳しいレポートがあっても、実際に経験しなければ分からないことがあるのだと、国際交流員の活動を通して実感しました。

私が九州の北西端に位置している平戸島に住むことになってから、もう二年ほどになります。平戸市は長崎県北部の小さな市ですが、歴史的に大きな役割がありました。奈良・平安時代には遣唐使船の寄港地、一七世紀には海外貿易拠点として栄えた城下町です。日本で初めて禅宗と真言宗の修業が平戸で行なわれたといわれています。さらに、パン、ビール、タバコ、西洋医学など色々な物が平戸から日本全国に広がりました。そして、平戸は日蘭貿易と日英貿易の発祥の地として有名な市です。私は国際交流員にならなければオランダと平戸の関係についてこのように知ることはなかったかもしれません。

平戸とオランダの歴史的な関係を生かして国際交流につなげることが私の仕事です。とても範囲が広いので、オランダ関係の企画は盛りだくさんです！勤務初日のことは強く印象に残っています。住民登録

などが行なわれてからすぐに仕事の説明を受けました。「来週の頭にはサッカー交流が始まっていますので、このスピーチを訳してくださいね。後これとこれも。」合計

二スピーチを二日間で訳し、交流事業がすぐに始まったので、朝から晩までとても忙しかったです。それは私の仕事を代表する経験になりました。毎日忙しいですが、毎日新しい経験と挑戦があります。



↑学校訪問

平戸での仕事の中には他にも忘れられない経験が色々あります。今年は平戸からはじまった日蘭通商四〇〇周年記念の年になっていますので、「平戸オランダ年」としてオランダ関係のイベントがたくさんあります。周りの同僚が新しいアイデアを積極的に受け入れることに大変感動しました。今年のために、昨年から外国人観光客向けに完全に新しい英語版ホームページを作ることが出来ました。アイデアを出してすぐ許可をいただき、ホームページを作ることでとても楽しくなりました。



↑国際交流事業でオランダのチーズベークパンケーキを焼く

今年に入ってからたくさん新しいプロジェクトがあつて、その中の一つはオランダ人二人による幼稚園児向けの幻灯機パフォーマンスでした。こういうイベントを企画すると、両国の大きな違いから様々なことを合わせたり、調整したりしないといけません。結果はいつも素晴らしいです。プロジェクトが終わった後に子ども達の楽しそうな笑顔を見ると、国際交流事業のボランティアスタッフの熱心な話を聞くときなどは、仕事をしてもっとも嬉しいときです。そんなときに国際交流員として仕事ができることを本当に感謝します。



↑ 通訳の様子

また、私の新しい挑戦は通訳でした。これはJETプログラムに参加する前に通訳を経験したことがない私にとって、とても不安なことでした。平戸についてからすぐ国際交流事業で通訳の経験を得ましたが、オランダ経済省大臣が長崎を訪問した時、二時間半程度の食事ですと市長と大臣の間で通訳することになりました。周りにはプロの通訳者しかいなくて、かなり緊張しましたが、始まった後にすぐ落ちついて通訳することができました。これは普段では簡単に出来ない、いい経験になりました。他にも面白い通訳の仕事

がありました。長崎のキリスト教会は世界遺産への認定を目指していますので、ある日、外国から審査員が来ました。一日中一緒に小さなボートに乗って、大雨の中、墓地の発掘や改宗したキリスト教徒について通訳しました。二年前にはそういう経験ができるとは思ってもみませんでした。

書道の先生の指導により、石から自分の印鑑を作ったり、剣道部の市民チームに入ったり、神社で行なわれた友達の結婚式に参加したりして、仕事以外にもたくさん貴重な経験ができました。その全てをここに書ききれませんが、一つだけ挙げると平戸おくんち祭りで行なわれている龍踊りがあります。私は二年前から龍踊りの保存会に入っています。二カ月間の練習の後に毎年一〇月二五日に朝から夜遅くまで踊ります。朝、神社からスタートして、一〇〇キロ以上の龍を持って、町中を歩いて回ります。悪運を払うために、踊るだけではなく龍の頭を一軒ずつ家に入れてあげます。とても大変な一日ですが、町の皆さんと一緒に



↑ 龍踊り

になって、外国人としてではなく、町の住民として付き合ってもらいます。昔から長崎県に伝わってきた伝統芸能に参加できるチャンスを得て、深く感動し、本当に忘れられない特別な経験になりました。

二年前に平戸に来た時には何をすればいいのか解らなかつたけれど、色々な事に挑戦して、貴重な経験がたくさんできました。現在の地方の過疎化の中で、国際交流員として人と人の付き合いを通じて皆さんの小さな交流の種を蒔きたかったので、自分のためだけでなく、地域にとっても将来に向かっていい効果がありますように、これからも頑張りたいと思います！



Remco Evert-jan Vrolijk

オランダのレールダム市出身。16歳で沖縄に1年間留学。イギリスのオックスフォード・ブルクス大学日本学部と観光学部へ入学し、一年間関西外国語大学へ留学。2005年にオランダのYFU国際交流財団法人に就職。2007年8月から長崎県平戸市にてCIRとして勤務し現在に至る。趣味は旅行、剣道、登山。

# JET の広場

The Japan Exchange and Teaching Programme

## われわれは ヒーローです

埼玉県越谷市役所秘書室秘書課国際交流員  
Geronimo Paras Brillo  
ジェロニモ・パラス・ブリジョ

子供のとき、土曜日の朝がどれほど好きだったか今でも覚えています。目覚し時計がなるとベッドから飛び降りて、まっすぐ居間へ行き近所の友達とじっと時間を待っていました。テレビからジージーと音が出ると同時に、僕たちは「ウルトラマン」と叫んでいました。

子供向けの番組、特に特撮テレビを見ることは子供時代の思い出の一つです。宇宙からやってきた怪獣から地球を守るロボットが活躍するものから戦隊戦士まで様々な番組を見ていました。寝るときになっても彼らがいなかったら、この星はどうなっていたらどう考えたこともありえます。後に兄から、そういうものがうそで日本で作られたものだとも聞いても、好きだったので、彼らが本当に存在していると信じてさえいました。これをきっかけにして日本について興味をもつようになりました。

二〇〇六年の夏、JETプログラムに参加してみないかと電話がありました。友達からは、英語教師交流みたいなプログラムだと聞きました。どちらにしても、この機会を見逃さず、面接を受けて、運命に任せたいのです。

蒸し暑い九月に返事をもらい、ここに来てから二年が経ちました。今でもマニラから三千キロも離れてこの机にすわっていることが不思議に思えます。国際交流員として特別な肩書きを頂き大変誇りに思っています。これで、外国人に情報提供するお手

伝いをしたり、越谷市民にフィリピンの文化を紹介する機会ができました。天気や仕事の環境に慣れるまでに一年程かかりました。日系企業にも勤めてきましたが、公務機関で働くとは誰が想像したでしょう。自分の国でも、住民税を払うときくらいしか役場に足を運びませんでした。

役所の書類などを英語とフィリピン語に訳すことも私の仕事です。日本語はあまり得意ではないのですが、電子辞書や課の同僚のおかげで、少しずつ楽になってきました。私の仕事で一番楽しみなのは、保育所を訪問し、子供たちと国際交流をすることです。

ここでは、子供たちに本を読んだり、歌を歌ったり、ゲームで遊んだりします。給食のときには、子供たちにわたしの箸の技を見せたり日本での生活の話もします。子供たちは正直に自分の気持ちを表現できるので、みんなの意見や話を聞きました。子供たちにとって外国人客は滅多にないことですから、私は可能な限り子供たちが外国人だと感じるように努めました。逆に、私にとって不思議に思うことは、子供たちは二人分食べても食べ物を残さないことや、ゴミの分別に一生懸命になることです。

さて、ちよつと私の出身地のことについて話します。私はマニラに生まれ育ちました。



↑保育所で子供たちと一緒に歌う

だが、家族はパンパンガ州の出身です。フィリピンのルソン島中部に位置します。パンパンガとは、川人という意味で、大川川の「リオ・グラン」はパンパンガ人の心と魂です。同じく川に恵まれていて驚きました。川の都と呼ばれていると聞いて驚きました。

五つ以上の河川が流れている越谷市は、第一級河川の元荒川で花火大会と鯉のぼり祭りが有名です。川の近くでの生活は楽しいことばかりではありません。なぜならば、今世紀最大の火山噴火のひとつ、パンパンガにあるピナツボ火山の噴火を経験したからです。一九九一年の噴火による火山泥流で、何千もの世帯が失われました。



↑地域防災訓練でのCPR体験

越谷市も、一九八六年の台風一〇号の影響で何百世帯が洪水の被害を受けました。フィリピンでは環境保護をはじめ、いろいろなボランティア活動をしていました。日本に渡っても、ボランティア活動を続けています。最近では地域防災訓練にボランティアとして参加し、英語通訳を担当しました。住宅部屋の形になっている地震模擬実験装置があつてこれで地震を体験したとき、生々しいピナツボ火山の記憶が蘇ってしまいました。そのほか、AEDやCPRなどの基礎を教えてくださいました。防災訓練に参加

加して、自然の恐ろしさをあらためて考えさせられました。災害にしても事故にしても、予測できないため、いつ起こるかかわかりません。ただ、事前の正しい知識や準備などによって、自分自身だけではなく、ほかの人の命も救えるかもしれません。

マニラは素晴らしい景色で有名なところですが、清潔面では評判があまりよくありません。すぐ気がつくのは、あちこちにたまっていくゴミだと思えます。ここで、マニラが越谷からゴミ管理について学ぶことが色々あると思います。なぜならば、隣に住んでいる方は、いつもゴミの日にになると「ちゃんと分別している？」と聞きます。越谷では、リユースというゴミ処理所があつて、そこは発電所でもあります。この施設は八〇〇トンのゴミを燃やして、毎日二万四千KWを発電しています。このパワーは何百世帯もの一年間の電気使用分です。普通はゴミを捨てて済みますが、ゴミは資源で燃料として使われることも知って、大変感心しました。

今年は何期最後の年です。たくさん忘れられない体験をして、たくさん勉強ができて、みなさんに心から感謝しています。日本にいられることで、世界または世の中をいろいろな点からみることができました。そして自分のことについてもっと知ることができました。世界に起こっているさまざまな出来事、例えば、環境問題や戦争などに目を向けるようになりました。日本

は思いやりの意味を教えてくださいました。世界を変えるのに一人だけでは無理だと思えます。しかし、日本に住んでいて、一人でも世界を変えられると信じ始めました。人を助けるのは人間の本能だと思えます。道を渡る老人を助けたり、ゴミを拾ったり、使っていない電気を消したりすることによって、小さなことでも地球を救える、また人を救えると思います。地球を救うには、私が子供のころ見ていたテレビのヒーローのような超能力なんかじゃないのです。ただ救おうという気持ちがあれば、私はきっとヒーローになれるのだと思えます。



Geronimo Paras Brillo

フィリピン・マニラ出身。フィリピン国立工業大学土木・工業教育専攻。日本の技術・文化に興味がある。2007年8月にJETプログラムに参加し、CIRとして埼玉県・越谷市へ。趣味は日帰り旅行や蹴球観戦。将来は在日国際関係のNPO・NGOで就職をしたいと希望。



↑友人と日光で

# Kleine zaadjes van uitwisseling

Toen ik uit het vliegtuig stapte om als een van de twee Nederlandse CIR's aan mijn JET uitdaging te beginnen dacht ik, gewapend met een 18 pagina tellend rapport van mijn voorganger, een aardig overzicht van mijn toekomstige werkzaamheden te hebben. Niets was minder waar, en dat niet ten slechte van het informatieve verslag. Geen enkel verslag had mij kunnen voorbereiden voor alle nieuwe ervaringen en uitdagingen die mij in het JET programma te wachten stonden.

Ik woon nu alweer twee jaar op een eilandje bij Kyushu dat gaat onder de naam Hirado. Hirado mag dan een kleine gemeente zijn in het noorden van Nagasaki, het heeft een grote geschiedenis. Van internationale handel tot uitvalsbasis van Japanse expedities naar China. De eerste zen en shingon rituelen werden hier gehouden en veel westerse producten zoals brood, bier en westerse medicijnen zijn hier geïntroduceerd. Als eerste plek waar de Nederlanders en de Engelsen handel dreven neemt het nog steeds een belangrijke plaats in, in de relaties tussen Japan en deze landen. Deze indrukwekkende geschiedenis heeft mij laten realiseren dat toen ik naar Japan kwam ik eigenlijk nog maar weinig wist over de relatie tussen het land waar ik zou gaan wonen en het land waar ik ben opgegroeid.

De geschiedenis is de reden voor mijn functie hier op het stadhuis. Het vormt een brede basis voor een enorm scala aan

werkzaamheden waarvan de meeste draaien om Nederland, en dat zijn er veel! Ik herriner mij nog goed de eerste werkdag. Ik werd na alle registratie procedures gebriefd over mijn werk. `Volgende week begint het voetbal uitwisselingsproject, dus je moet deze speech vertalen, en deze, en...` In totaal lagen er 12 speeches klaar om vertaald te worden in twee dagen en daarna begon direct de uitwisseling waarvoor ik elke dag van 's morgens vroeg tot 's avonds laat in de weer was. Het zou tekenend zijn voor de rest van mijn werk in Hirado: altijd druk en altijd weer nieuwe ervaringen en uitdagingen.

Een aantal dingen die ik voor mijn werk hier heb moeten doen zal ik nooit vergeten. Om te beginnen de viering van de 400 jaar handelsrelaties tussen Japan en Nederland, die begonnen zijn hier in Hirado. Gedurende dit jaar worden er allerlei festiviteiten georganiseerd en ik mag mij zeer gelukkig prijzen met een werkgever die erg open staat om nieuwe ideeën uit te proberen. Zo heb ik vorig jaar in de aanloop naar dit jaar naar eigen smaak een geheel nieuwe Engelse website kunnen maken, iets wat ik met veel plezier gedaan heb. Ook dit jaar hebben we veel nieuwe projecten opgezet en uitgevoerd. Zo kwamen er bijvoorbeeld 12 Nederlanders naar Hirado om een show voor kleuters te geven. Tijdens de planning en uitvoering van dit soort evenementen wordt altijd goed duidelijk hoe groot en sterk de verschillen kunnen zijn tussen

# Saving the Planet

I remember how much I enjoyed Saturday mornings when I was a child. Once the alarm clock rang, I would get up quickly from my bed and run towards the living room. There, my friends from the neighborhood and I would wait. Suddenly, a loud cracking sound would burst out from the television set, and all of us would shout "Ultraman!".

Watching children's programs is one of my fondest childhood memories. I used to watch hundreds of them, programs about things like giant robots or cyborg heroes fighting to save Earth from alien monsters. Whenever it was time for bed, I always wondered what would happen to our planet if super heroes never existed. I loved them so much. If it were not for my big brother telling that they are all fake and made in Japan, I would have believed they truly existed. These programs were one of the reasons why I became interested in Japan. It was summer of 2006 when I got a phone call asking me if I would be interested in joining the JET Programme. I had heard from my friends that it was some kind of English language teaching programme. I did everything I could to seize this opportunity, took the interview and then left it all up to fate.

It has been nearly two years since I received the call in the humid monsoon month of September that brought me to where I am now. I still find myself astounded sitting here at my desk, 3,000 kilometers away from Manila. I was given the exceptional title of Coordinator for International Relations. I have had the opportunity to share Philippine culture and offer assistance to

foreign national residents. It took me a year to adjust to the living and working environment. At home, I had worked with many Japanese companies, but who would ever have thought that I would be working at a public office. Back home, the only reason I drop by the city office is to pay my residence tax.

It is also my duty to translate forms and documents from Japanese to English or Tagalog. It is not easy when you cannot speak Japanese but thanks to my colleagues and my handy dictionary, office work has been a little easier. Also, my favorite part of the job is visiting day care centers where I have the opportunity to spend time with them reading stories, singing songs and playing a lot of games. During lunch break, I am able to show off my chopstick skills and talk about my life here in Japan. It also gives me the chance to listen to them talk about their experiences. It is not often that they have visitors from other countries, so I try to make them feel that I am as foreign as possible. Some things that seemed most foreign to me happened during lunch time, for example, I wondered how a child can eat a double helping and not leave any leftovers? And, how they all can be so diligent about separating combustible and non-combustible trash? It is still a mystery to me.

Let me talk a little about where I come from. I was brought up in Manila, but my family is from Pampanga. Pampanga is located in central Luzon, the northern island of the Philippines. "Pampanga" means "river people" and the Rio Grande de la Pampanga is the heart and mind of the Pampanga people. I was surprised to hear that

## Remco Evert-jan Vrolijk

twee landen. Natuurlijk gaat dit soms gepaard met aanpassingen en tegenslagen maar het resultaat is altijd fantastisch en een aantal van de beste momenten die ik hier beleefd heb waren tijdens of na afloop van dit soort evenementen wanneer ik kleine kinderen met grote ogen en een glimlach naar de Nederlanders zag kijken, of de enthousiaste verhalen hoorde van vrijwilligers. Dit soort momenten maken het werk als CIR echt waardevol.

Een andere ervaring is het tolken, wat ik nog nooit had gedaan voordat ik aan het JET programma begon. Na een aantal uitwisselingsprojecten moest ik voor de burgemeester 2 uur lang vertalen tijdens een dinner met de Nederlandse minister voor Economische zaken. In het begin zeer zenuwslopend maar het ging eigenlijk steeds beter. Later kwamen ook culturele experts om vooronderzoek te doen naar de voordracht voor de registratie van de kerken in Hirado als UNESCO Werelderfgoed. Deinerend op een boot en met andere professionele vertalers, stond ik vertalingen te schreeuwen over opgravingen en bekeerde christenen. Wie had twee jaar geleden gedacht dat ik dit soort ervaringen als tolk zou opdoen in Japan? Ik in ieder geval niet!

Naast mijn drukke werk zijn er ook veel andere dingen die mijn tijd hier zo bijzonder maken, zoals het beiten van mijn eigen inkan-stempel, meedoen aan de kendo teamwedstrijden en de shinto

ceremonie bijwonen van de bruiloft van een vriend. Er zijn teveel dingen om op te noemen maar zeker een bijzondere ervaring is om mee te doen aan de drakendans tijdens het Hirado Okunchi festival. De trainingen van twee maanden monden uit in een hele lange dag op 25 oktober waarop we van 's ochtends vroeg tot 's avonds laat de drakendans doen. Het begint 's morgens bij de tempel en we lopen dan een dag lang door de stad met de meer dan 100 kilo wegende draak. Om boze geesten te verjagen dansen we niet alleen, we steken de kop bij elk huis in de stad naar binnen. Het is een zware dag maar het is ontzettend mooi om met iedereen samen mee te doen, niet als buitenlander maar als inwoner van mijn wijk. Ik ben ontzettend dankbaar dat ik een kans op om mee te doen aan deze eeuwenoude traditie van de Nagasaki regio. Het is zeker een van de ervaringen die ik nooit zal vergeten.

Ik had geen idee wat ik moest verwachten toen ik twee jaar geleden in Hirado aankwam, maar na zoveel uitdagingen heb ik belangrijke ervaringen op kunnen doen. Ik hoop dat door mijn werk voor de internationale uitwisselingsprojecten en door al de verschillende ontmoetingen die ik hier heb gehad, zaadjes heb kunnen zaaien voor iets moois in de toekomst, vooral gezien de huidige bevolkings afname hier. Ik hoop dat mijn aanwezigheid hier niet alleen voor mijzelf maar ook voor anderen om mij heen nuttig zal zijn!

オランダ語

## Geronimo Paras Brillo

Koshigaya City is also known as the "city of rivers".

Koshigaya City is intersected by five rivers, which are the location of local events like the Annual Hanabi Taikai Fireworks Festival and Koi Nobori Carp Streamers Festival on the Motoarakawa River.

I know that living near a river is not always fun. This is because I have experienced one of the largest volcanic explosions of the 20th century. The aftermath of Mount Pinatubo left thousands homeless who were swept away by lahars. Koshigaya also has had its share of disasters. In 1986, Typhoon No. 10 flooded the city leaving hundreds of houses underwater.

In the Philippines I was involved in many environmental preservation volunteer activities. After coming to Japan, I joined a fire and earthquake emergency exercise specially prepared for foreign nationals residing in city, where I acted as an English language interpreter explaining the dangers of earthquakes and fires. There was an earthquake simulation machine too, and everybody took turns riding it. Looking at the makeshift house shaking up and down gave me flashbacks of when Mount Pinatubo erupted. They taught us what to do in case of an earthquake or fire, and how to handle the fire extinguisher. They also taught us the basics of CPR and how to use an AED. It made me realize that there is nothing we can do to stop the forces of nature, however knowing how nature works will help us know how save not only ourselves but also other peoples' lives.

Many people who visit Manila find its scenic places magnificent, but I would not say that cleanliness is among its good points. One thing that you will notice is garbage piled at every corner. Manila could learn a lot of things about garbage control from Koshigaya. I know because my neighbor always reminds me to separate my trash on garbage collection days. There is one facility here in Koshigaya that literally turns garbage to gold, well almost. REUSE is not only a garbage collecting facility but also an electric power plant. It turns 800 tons of garbage to fuel and produces about 24,000 KW of electric power a day. This power can run hundreds of residences for a year. I guess the lesson here is that things you throw away are not trash but natural resources.

This is my last year on the job, but I will never ever forget the time that I have spent here. I learned a lot of things about Japan. It also made me see the world from a different perspective and helped me discover my own self. It made me more aware of global issues like environmental problems and wars. And, Japan taught me the meaning of volunteer work and how to have more consideration for others. Often it seems it is impossible for one person to make a difference, but living here in Japan has taught me that even just one person can. Learning CPR, helping elderly people cross the street, picking up a can, or just separating your own trash at home is in a small way saving lives or saving the planet. You do not need superpowers like those you see in children programs, you just have to have the will to try and help others, and you become a hero.

英語